

資料

ソーシャルワーカーによる傾聴の意義と今後の課題

吉田 護 昭*¹

1. 緒言

近年、わが国は社会情勢の変化に伴い、失業や貧困、生活困窮、いじめや虐待、自殺、などの多くの問題が山積しており、これらの多くは複雑かつ多様な生活課題を重層的に抱えている¹⁾。このような問題やニーズを抱えている人たちの相談援助を担う専門職として、社会福祉士や精神保健福祉士といったソーシャルワーカーが存在する。ソーシャルワーカーはクライアントの相談に応じるとき、「ワーカーはクライアントの話しに耳を傾けることから出発すべきである」²⁾とし、クライアントの思いや気持ちを十分に反映しながら必要な社会資源へと結び付け、クライアント自らが望む生活の実現につながるための支援を展開する。岡本は社会福祉実践、とりわけソーシャルワーク実践において、利用者本位の理念を具現化し、実践活動を通して新たな援助理論を構築していくためには、利用者の言い分や言説を傾聴することから始まると述べている³⁾。久保も「クライアントの話しを『聴く』ことはワーカーの相談援助の根本的な役割である」²⁾と述べ、クライアントの言うことを傾聴することは重要であるとしている⁴⁾。

その傾聴とは広辞苑によると「耳を傾けてきくこと。熱心にきくこと」⁵⁾の意味をもつ。社会福祉領域では「クライアントのペースで話してもらい、それに対して、うなずきや繰り返し、質問、感情を受けとめ表現するなどの方法を通して、クライアントの話しを一生懸命に聴いていることを伝える」⁶⁾と定義されている。また傾聴とは「サービス利用者に自由に話をしてもらい、援助者はその話をじっくりと聴くという面接の基本的な姿勢のこと」⁷⁾であるとされている。

これらの定義や意味から、ソーシャルワーカーの傾聴とは面接を通してクライアントの話しに耳を傾け、心で受けとめ、相手をわかろうとする、相談援

助の基本である⁸⁾。

現在、筆者は障害分野でソーシャルワーカーとして従事している。社会福祉領域のなかでも障害分野に関しては、2013（平成25）年の障害者総合支援法の施行、2014（平成26）年の障害者権利条約の批准、2016（平成28）年の障害者差別解消法の施行など、障害者施策が次々に展開されることになった。こうした施策が展開されるなか、ソーシャルワーカーは障害者が地域のなかで自らの望む生活を送ることができるように、障害者自らの意思に基づいて支援を展開することが重要である⁹⁻¹¹⁾。障害分野においては、身体障害、知的障害、精神障害、発達障害など、障害種別が多岐にわたっており、障害特性も様々である。そのため、ソーシャルワーカーは個々の障害特性を理解しつつ、クライアントの表情や態度などの非言語を含め、クライアントから発せられる、語られる言葉や思い、気持ちを十分に受け止め、その真の想いを受けとめていくことが求められており、その真の想いを理解するために傾聴することは重要である^{12,13)}。

このように、傾聴に関する定義や意味に加え、相談援助を専門とするソーシャルワーカーによる傾聴や多様な障害特性をもつクライアントに対しておこなう傾聴は基本であり重要な技法であることは明らかである。こうして、ソーシャルワーカーによる傾聴の重要性が明らかであるなか、相談援助を専門とするソーシャルワーカーがより専門的な知識や技術をもって傾聴することに意義をもつためにも、これまでにすすめられてきた傾聴に関する研究実態について整理する必要があると考える。

そこで、本研究はこれまでにすすめられてきた傾聴に関する先行研究の実態を整理する。その整理を踏まえて、今後、ソーシャルワーカーが相談援助実践で傾聴する際に活かすことのできるための研究課題について考察する。

*1 済生会山口地域ケアセンター

(連絡先) 吉田護昭 〒753-0061 山口市朝倉町4-55

E-mail: yoshida.moriaki@navy.plala.or.jp

2. 研究方法

先行研究を整理するにあたり、論文、図書・雑誌などの学術情報で検索できるデータベース・サービスとしてCiNii(サイニイ)を採用した。アクセスサイトは<http://ci.nii.ac.jp>からアクセスをし、検索期間を2017(平成29)年5月20日~2017(平成29)年5月23日とした。

2.1 検索方法

傾聴に関する文献の実態数を把握するために、論文、図書・雑誌、本文掲載の有無を含め、検索して抽出した全ての文献を実態数として取り上げ整理した。

2.2 文献整理の方法

「傾聴」のみの検索用語で全体数を把握した。その全体数をもとに、年代別で整理をした。

次に、傾聴を実践する領域や技術として、分野別、職種別、障害種別、相談援助技術別に文献の実態数を整理した(なお、検索用語が複数含まれる文献の場合、重複してそれぞれの項目でカウントした)。

2.3 文献の具体的な整理方法

年代別では、当事りの社会福祉の政策状況から1970年代を「社会福祉の見直し期」、1980年代を「福祉の拡充期」、1990年代を「福祉の改革期」、2000年代~現在まで「社会福祉基礎構造改革以降の期間」の4つの期間に区切って整理をした。

分野別では、社会福祉領域並びに医療関連領域において傾聴を実践することがある分野として「看護」、「心理」、「精神」、「高齢」、「障害」、「介護」、「児童」を検索用語として選定し、傾聴と掛け合わせて検索した。

職種別でも分野別と同様に傾聴を実践する関連職種として「医師」、「看護師」、「臨床心理士」、「理学療法士」、「作業療法士」、「ソーシャルワーカー」、「社会福祉士」、「精神保健福祉士」、「介護支援専門員」、「相談支援専門員」を検索用語として選定し、傾聴と掛け合わせて検索した。

障害種別では障害者自立支援法で3障害が一元化された「身体障害」、「知的障害」、「精神障害」に加え、発達障害者支援法による「発達障害」、児童分野として「障害児」を検索用語として傾聴と掛け合わせて検索した。

相談援助技術では傾聴に関連する用語として主に「面接」、「相談援助」、「対人援助」の3つを検索用語として傾聴と掛け合わせて検索した。

以上から傾聴に関する実態数の整理のみではなく、傾聴に関する文献内容についても整理をした。筆者が障害分野のソーシャルワーカーとして従事していることに加え、傾聴は相談援助技術において重要な技法の一つであることから、障害分野と相談援助技術に焦点をあて文献内容を整理した。また、傾聴を中心とした内容を抽出するために、タイトルに傾聴が含まれる先行研究(論文として掲載されているものに限る)として10編の文献抽出し整理の対象とした。

3. 結果

3.1 年代別、分野別、職種別の実態

傾聴に関する文献の全体数では973編の文献を抽出した。その973編の文献を年代別で整理すると、1970~1979年では4編、1980~1989年では10編、1990~1999年では53編、2000~2009年では431編、2010~2017年5月現在までは475編の文献を抽出した(図1)。

分野別では、「看護」、「心理」、「精神」、「高齢」、「障害」、「介護」、「児童」を検索用語として選定し傾聴と掛け合わせて検索した結果、755編の文献を抽出した。その内訳は、看護で254編、心理で139編、精神で137編、高齢で79編、障害で79編、介護で47編、児童で20編となった(図2)。

職種別では、「医師」、「看護師」、「臨床心理士」、「理学療法士」、「作業療法士」、「ソーシャルワーカー」、「社会福祉士」、「精神保健福祉士」、「介護支援専門員」、「相談支援専門員」を検索用語として選定し傾聴と掛け合わせて検索した結果、164編の文献を抽出した。その内訳は、医師で40編、看護師で66編、臨床心理士で9編、理学療法士で33編、作業療法士で6編、ソーシャルワーカーで4編、社会福祉士で3編、精神保健福祉士で1編、介護支援専門員で2編となった。相談支援専門員では文献が見当たらなかった(図3)。

3.2 障害分野関連別、相談援助技術別の実態

分野別で「障害」は79編の文献を抽出したが、その他に障害分野に関連するものとして「障害者福祉」、「障害者自立支援法」、「障害者総合支援法」のキーワードをそれぞれ傾聴に掛け合わせて検索したが、どのキーワードとも文献は見当たらなかった。

障害種別では、「身体障害」、「知的障害」、「精神障害」、「発達障害」、「障害児」を検索用語として傾聴と掛け合わせて検索した結果、29編の文献を抽出した。その内訳は、身体障害で4編、知的障害で3

編, 精神障害で1編, 発達障害で8編, 障害児で13編
 となった(図4).
 相談援助技術では「面接」, 「相談援助」, 「対人援

助」のそれぞれに傾聴を掛け合わせて検索した結果,
 70編の文献を抽出した. その内訳は, 面接で58編,
 相談援助で3編, 対人援助で9編となった(図5).

編

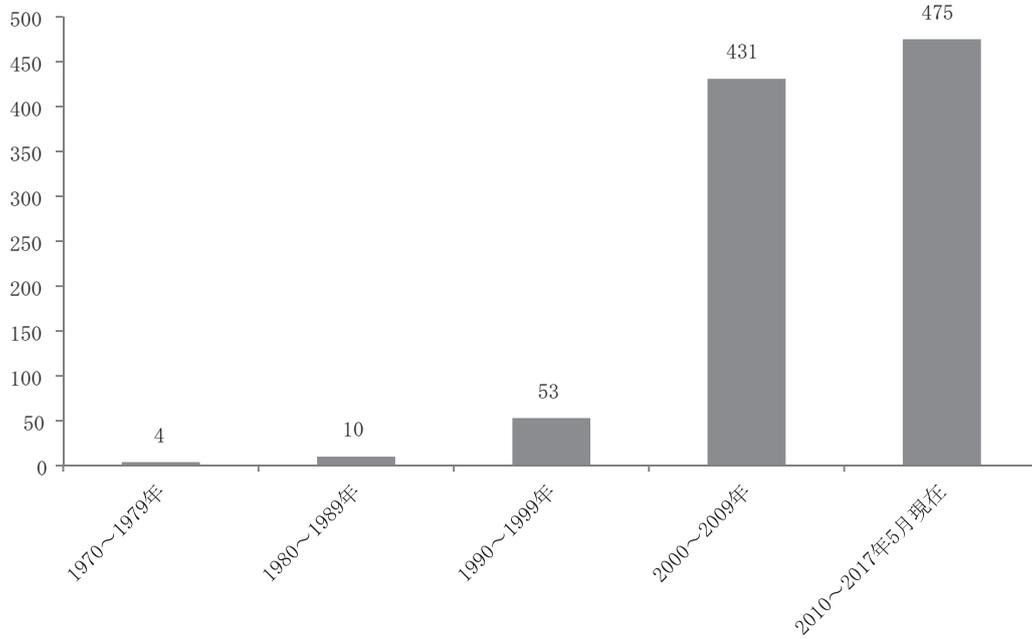


図1 年代別文献数の推移

編

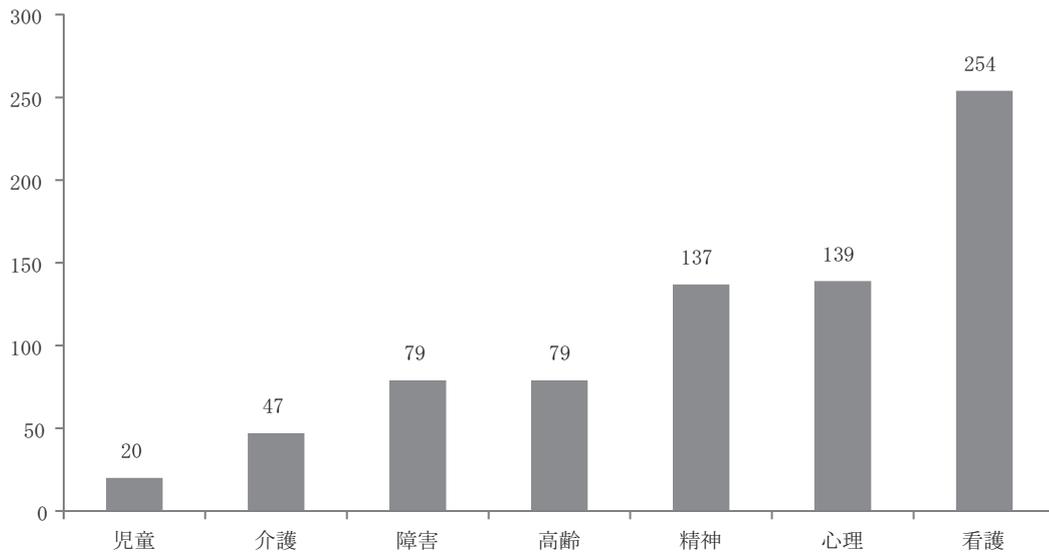


図2 分野別に関する文献数

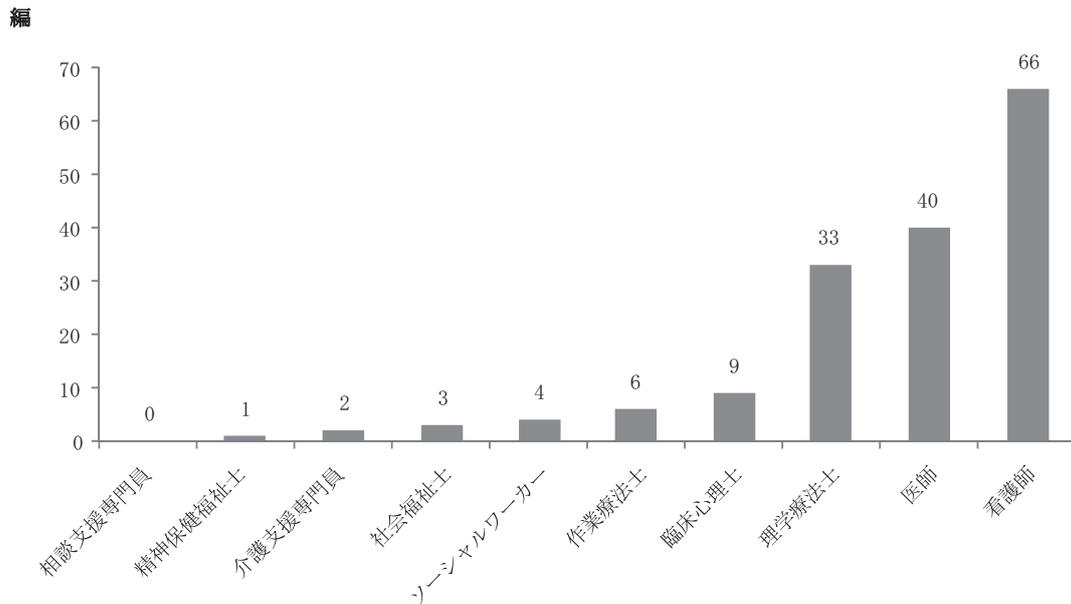


図3 職種別に関する文献数

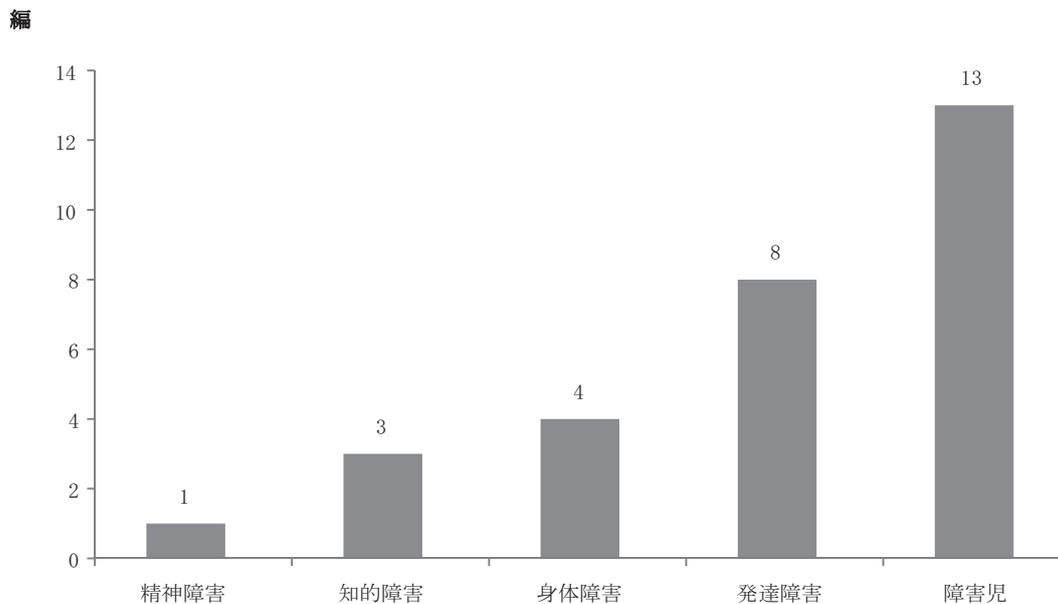


図4 障害別に関する文献数

3.3 先行研究の内容整理

本項では、研究方法で述べたようにタイトルに傾聴が含まれる先行研究10編を内容整理の対象とした。10編の内訳は、「障害」が3編（障害種別では該当しなかった）、「対人援助」が3編、「面接」が3編、「相談援助」が1編となった（表1）。

次項では抽出した10編の先行研究の内容について整理した。

3.3.1 クライアント自身の変化

本項では、クライアント自身に変化していくことについて報告した2編の先行研究を分類した。村田は対人援助実践において傾聴すること自体、援助として独自の意味をもつとしている¹⁴⁾。傾聴の独自の意味として存在論的意味と援助的意味をもち、それぞれに論理的プロセスと援助プロセスがある。そのプロセスを経た結果、クライアントは自己の存在を

編

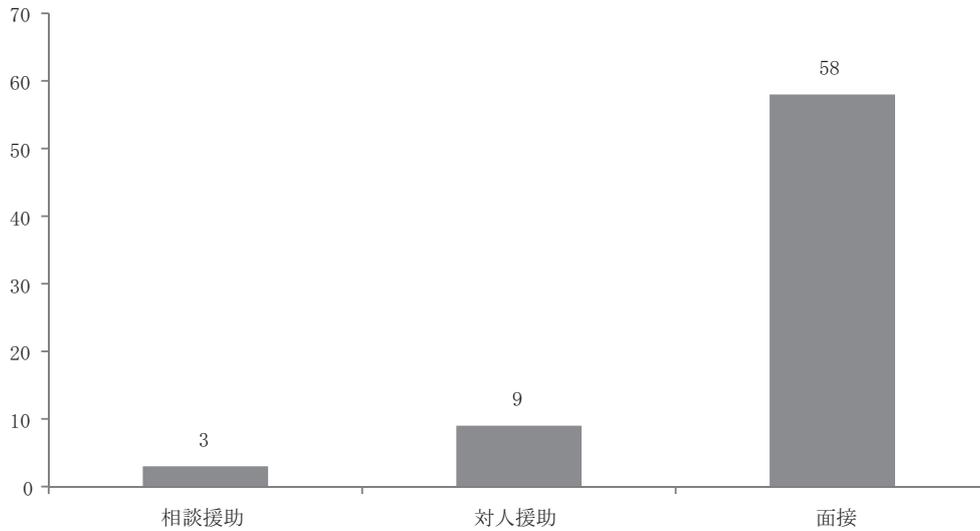


図5 相談援助技術に関する文献数

表1 先行研究の検討結果一覧

文献	分類項目		
	クライアント自身の変化	援助者の傾聴のあり方 (かかわり方, 態度, 認識)	大学生で学ぶ傾聴
村田 ¹⁴⁾ 1996	○ (対人援助)		
西原 ¹⁵⁾ 1996	○ (面接)		
荒木 ¹⁶⁾ 2001		○ (障害)	
田形と丸岡 ¹⁷⁾ 2003		○ (障害)	
前田 ¹⁸⁾ 2003		○ (対人援助)	
鳥海 ²¹⁾ 2003		○ (相談援助)	
玉里 ¹⁹⁾ 2013		○ (面接)	
佐藤 ²²⁾ 2014			○ (対人援助)
山口ら ²⁰⁾ 2015		○ (障害)	
山崎 ²³⁾ 2016			○ (対人援助)

上段：分類項目，下段：検索用語

回復し変化をもたらすことにつながると述べている。

西原はクライアント自らが問題を分析し、解決の手立てを見つけ出すためにソーシャルワーカーが傾聴することは重要であるとしている¹⁵⁾。

このように2編の先行研究を整理した結果、傾聴することによってクライアント自らの問題や課題解決をしていくことにつながったり、自己成長につながるといった、クライアント自身が変化していることについて報告している。つまり、問題解決の主体はクライアントであり、その問題にクライアント自らの力で取り組むことができるように支援するとした、クライアント主体で捉えた報告となっている(表2)。

3.3.2 援助者の傾聴のあり方(かかわり方、態度、認識)

本項では、援助者の傾聴のあり方(かかわり方、態度、認識)について報告した6編の先行研究を職種別に分類した。その結果、看護師が5編、ソーシャルワーカーが1編であった。

荒木は慢性期統合失調症患者への傾聴の効用について述べている¹⁶⁾。調査結果として、看護師における傾聴は患者とのかかわり方やかわるプロセスが重要であるとしている。

田形と丸岡は構音障害を持つ患者の症例から看護における傾聴について述べている¹⁷⁾。実践の結果として、看護師側の先入観によって患者の話しを傾聴できなかつたり、感情の表出や能力の限界を妨げたりなど患者理解に至らないことがあるとしている。

前田は電話相談をおこなう看護職のロール・プレイにおける相互行為を分析している¹⁸⁾。その結果、相談内容によっては傾聴する必要性の有無があることやその有無によって、トラブルを助長させてしまう可能性もあることを明らかにしている。

玉里は看護師による傾聴について、慢性統合失調症患者10名を対象に半構成的面接を行い、彼らが捉える傾聴の意義と様相について断片的な語りをもとに質的記述的に分析をしている¹⁹⁾。その結果、看護師の傾聴の仕方によっては患者の意思表示を可能に

し、患者の自己成長のきっかけにつながることを明らかにしている。

山口らは胃ろう造設を選択した患者とその家族の思いを明らかにしている²⁰⁾。その結果、患者・家族が胃ろう造設を決めた背景にある様々な思いを看護師が知ることは少ないため、調査を通して、患者や家族の様々な思いの背景を傾聴することの重要性を再確認している。

鳥海は在宅介護支援センターのソーシャルワーカーがおこなう初期面接に焦点をあて、傾聴に対する認識や態度について明らかにしている²¹⁾。調査の結果として、ソーシャルワーカーはソーシャルワーカーの価値や倫理原則に基づいて傾聴を実践し、利用者を多面的に理解することが重要であるとしている。

このように6編の先行研究を整理した結果、援助者がクライアントに対して傾聴をおこなった結果、援助者のかかわり方をはじめ、傾聴の方法や態度、クライアントを捉える援助者の認識について明らかにしたものであった(表3)。

3.3.3 大学生で学ぶ傾聴

本項では、大学生で学ぶ傾聴について報告した2編の先行研究を分類した。

佐藤は社会福祉援助技術演習の課外活動を通して、①傾聴の技法を身につけることだけに留まらなかったこと、②利用者の生活史をはじめ、家族や地域との関係を得ることができたこと、③対人援助関係の持つ双方向性(人と人との出会い)を形成することの大切さなど、大学生自らの傾聴に関する認識の転換を体験できた契機について報告している²²⁾。

山崎は心理学に関心のある大学生を対象に質問紙調査を実施した結果、授業内のワークや課外活動、日常の人間関係の中で体験的に学習し知識として傾聴を学ぶ機会があると回答している学生が大半であった²³⁾。その結果を検討したところ、大学生自らのかかわりのスキルやスタイルが変化していくことのできるプロセスを学びの中に取り入れるために、傾聴に関する抽象的な概念を学ぶことに加え、経験

表2 クライアント自身の変化

文献	文献内容
村田 ¹⁴⁾ 1996	傾聴には存在論的意味と援助的意味があり、それらのプロセスを経ることにより、クライアントの自己回復につながるとしている。
西原 ¹⁵⁾ 1996	クライアント自らが問題を分析し、解決の手立てを見つけ出せるように支援することがソーシャルワーカーの役割である。

表3 援助者の傾聴のあり方（かかわり方・態度・認識）

文献	文献内容
荒木 ¹⁶⁾ 2001	看護における現象学的アプローチは患者とのかかわり方やかかわるプロセスを重要とする。
田形と丸岡 ¹⁷⁾ 2003	看護師側の先入観によって傾聴することができなかつたり、感情の表出や能力の限界を妨げたり、患者理解に至らないことがある。
前田 ¹⁸⁾ 2003	相談内容によっては、傾聴の必要性の有無がある。その有無によっては、トラブルを助長させてしまう可能性もある。
玉里 ¹⁹⁾ 2013	看護師の傾聴の仕方によっては患者の意思表示を可能にし、患者の自己成長のきっかけにつながる。
山口ら ²⁰⁾ 2015	患者や家族の様々な思いを看護師が知ることは少ないため、それらの背景を傾聴することが重要である。
鳥海 ²¹⁾ 2003	援助者は傾聴する場面において利用者を多面的に理解することを実践の中核としており、自らの職業に誇りを持って、クライアントに意志的に関わっている。

表4 大学生で学ぶ傾聴

文献	文献内容
佐藤 ²²⁾ 2014	傾聴することによって、利用者の生活史や家族、地域との関係性などを学び、傾聴に関する認識の転換を体験できることにつながる。
山崎 ²³⁾ 2016	傾聴の学習には、傾聴の抽象的な概念を学ぶことや実体験や経験を交えたプロセスが必要である。

や体験を取り入れていくことが必要であるとしている。

このように2編の先行研究を整理した結果、近年では大学生を対象とした傾聴に関する研究が進められており、実践現場での体験や経験を通して、傾聴に対する考え方や重要性を学生時代から気付かせることの意義を報告している。つまり、大学生主体で捉えた報告となっている（表4）。

4. 考察

本項では、これまで整理した実態から傾聴に関する今後の研究課題について考察を述べる。

4.1 文献の実態数の整理からの考察

傾聴に関する文献の実態を整理すると2000（平成12）年以降、急激に文献数が増加している。その背景には、2000（平成12）年の社会福祉基礎構造改革によって、福祉サービスに関する利用が措置から契約になったこと、サービスの質の向上やクライエン

トがサービスを選択する権利保障があることなどから、クライアントにかかわる援助者がこれまで以上にクライアントおよびその家族の話しや主張を聴くことが必要になったのではないかと推測する。

続いて、分野別、職種別では国家資格に関する法制度や関連施策の制定された年代順に影響があると考える^{†1)}。ソーシャルワーカーの国家資格として誕生した社会福祉士や精神保健福祉士、障害分野の相談支援として誕生した相談支援専門員らの歴史は他の分野に比べて浅い。そのため、看護師（看護分野）の傾聴に関する研究報告は圧倒的に多く、相談援助に携わる社会福祉士や精神保健福祉士などのソーシャルワーカーの傾聴に関する研究報告が少ないことは当然のことといえる。また、障害種別に関する文献においても文献数の違いが見受けられたため、職種ごとに制定された年代順影響があると考え^{†2)}。

このように、傾聴に関する文献の実態数の整理から、各分野、各職種においては制定された年代や法

制度によって文献数が異なっていた。そのなかでも福祉分野をはじめ、社会福祉士や精神保健福祉士などのソーシャルワーカーの傾聴に関する研究報告が少ないことが明らかとなった。そのため、今後は、福祉分野をはじめ、特に、社会福祉士や精神保健福祉士などの相談援助職者であるソーシャルワーカーによる実践報告や事例研究をすすめていく必要がある。

4.2 先行研究の内容整理からの考察

先述したように傾聴に関する文献の実態については2000(平成12)年を境に大きな変化を示している。本論文で抽出した10編の先行研究においても、そのことは明らかとなった。

2000(平成12)年以前の研究としては、村田¹⁴⁾や西原¹⁵⁾が1996(平成8)年に報告した2編である。この2編は、傾聴することにおけるクライアントの変化に着目しており、クライアント主体にした研究報告となっている。2000(平成12)年以降では、10編の先行研究のうち8編が報告されており、6編は援助者の傾聴のあり方(援助者のかかわり方、態度、認識)に着目しており、援助者主体にした研究報告となっている。また、この6編のうち5編は看護師のおこなう傾聴に関する研究報告¹⁶⁻²⁰⁾であった。

このように、2000(平成12)年を境にして、クライアント主体とした研究から援助者主体とした研究へと転換していることが明らかとなった。そして、援助者による傾聴のあり方に関する研究がすすめられていくなかで、ソーシャルワーカーなどの相談援助を担う人たちによる研究が未だに少ない。そのことから、今後、ソーシャルワーカーをはじめとした相談援助職者らによる傾聴のあり方に関する研究として、例えば、相談援助者の傾聴技法の自己分析、傾聴後のクライアントの生活の分析、初回面接における逐語録からの分析、傾聴以外の面接技法やアプ

ローチとの関連性、相談援助者と他分野の傾聴の比較など、様々な方法による研究を積み重ねていくことが必要である。

最後に、近年においては大学生を対象とした傾聴に関する研究が報告されている^{22,23)}。学生にとって地域での課外活動や演習、医療機関や福祉施設等の実習は自己成長や自己覚知できる重要な場となっている²⁴⁻²⁷⁾。そして、学生自身の自己成長や自己覚知をすることのできる一つの方法として、ソーシャルワーカーなどの相談援助職者と学生との実習スーパービジョンがある。そのスーパービジョンを通して、現場のソーシャルワーカーは傾聴することの重要性や目指すべきソーシャルワーカー像などを学生に伝達することが重要である²⁸⁾。また、佐藤は実習教育について、学生自身が持つ知識を実践の場で使えるか否かではなく、学生自身の学び方や姿勢が問われていると述べている²⁹⁾。

このように、学生自身が演習や実習を通して学ぶ傾聴やその他の学びは机上で学ぶことよりも重要であるとともに、学生に指導する実習指導者のあり方も重要となる。今後も大学生を対象とした傾聴に関する研究を積み重ねていくことは必要である。

5. おわりに

本論文では、傾聴に関する文献の実態数の整理に加え、10編の文献内容を整理した。その整理の結果、相談援助実践を専門とするソーシャルワーカーをはじめ、障害分野並びに福祉分野全般において傾聴に関する研究が少ないことが明らかとなった。

そして、クライアントが住み慣れた地域で自らが望む生活を続けていくことができるために、今後、筆者が従事する障害分野をはじめ、相談援助を専門職とするソーシャルワーカーらによる傾聴に関する研究や実践報告を積み重ねていくことが必要である。

注

- †1) 分野、職種別の法制度として、保健師助産師看護師法(1948年)、医師法(1948年)、理学療法士及び作業療法士法(1971年)、社会福祉士及び介護福祉士法(1987年)、精神保健福祉士法(1997年)、相談支援専門員(2006年)などである。
 †2) 障害別では児童福祉法(1947年)、身体障害者福祉法(1949年)、精神薄弱者福祉法(現:知的障害者福祉法)(1960年)の制定などである。

文 献

- 1) 山崎美貴子：越境するソーシャルワーク。ソーシャルワーク研究, 39(4), 257, 2014.
- 2) 久保美紀：ソーシャルワークにおける「聴く」ということ一意味生成の過程として一。明治学院論叢, (690), 155-175, 2003.
- 3) 岡本民夫：社会福祉援助の課題。仲村優一、一番ヶ瀬康子、右田紀久恵監修、岡本民夫、田端光美、濱野一郎、古川孝順、宮田和明編集、エンサイクロペディア社会福祉学、初版、中央法規出版、東京、20-23, 2007.

- 4) 山辺朗子：相談援助のための面接の技術。社会福祉士養成講座編集委員会編，新・社会福祉士養成講座7 相談援助の理論と方法，第2版，中央法規出版，東京，243-262，2010。
- 5) 新村出編：広辞苑，第六版，岩波書店，東京，2008。
- 6) 中央法規出版編集部：六訂 社会福祉用語辞典，初版，中央法規出版，東京，2012。
- 7) 社団法人日本社会福祉士養成校協会：わが国の社会福祉教育，特にソーシャルワークにおける基本用語の統一・普及に関する研究報告書。1-58，
http://www.jascsw.jp/researchpaper/h15_yougo_report.pdf，2005。（2017.5.23確認）
- 8) 宮岡京子：面接の基礎技術。平山尚，平山佳須美，黒木保博，宮岡京子共著，社会福祉実践の新潮流—エコロジカル・システム・アプローチ（MINERVA 福祉専門職セミナー④），初版，ミネルヴァ書房，京都，66-101，1998。
- 9) 石渡和実：意思決定支援とソーシャルワーカー求められる障害者観・人間観の転換—。ソーシャルワーク研究，41(4)，275-288，2016。
- 10) 山内健生，望月隆之：障害のある人の相談支援事業の歴史の変遷とその目指すべきもの。福祉社会開発研究，(7)，57-68，2015。
- 11) 北野誠一：本人中心支援計画（サービス等利用計画）策定における意思決定・表明支援。ソーシャルワーク研究，41(4)，313-319，2016。
- 12) 沖倉智美：ソーシャルワーク技術を高めるために 演習『当事者の声を聴く』（1）—その意義と視点—。月刊福祉，86(7)，東京，90-93，2003。
- 13) 沖倉智美：演習『当事者の声を聴く』—参加者インタビューからその意義と課題を検証する—。大正大学大学院研究論集，(36)，254-246，2012。
- 14) 村田久行：傾聴の援助的意味—存在論的基礎分析—。東海大学健康科学部紀要，(2)，29-38，1996。
- 15) 西原雄次郎：“傾聴”再考—ソーシャルワーカーと面接—。テオロギア・ディアコア，(30)，57-73，1996。
- 16) 荒木孝治：慢性期精神分裂病患者への傾聴の効用について—思考障害を持つ患者への理解の変化を分析して—。大阪府立看護大学紀要，7(1)，39-45，2001。
- 17) 田形香織，丸岡亜希子：看護中の傾聴を考える—構音障害をもつ患者の一症例を通して—。通信医学，55(3)，197-199，2003。
- 18) 前田泰樹：「傾聴」活動の論理文法について—電話相談看護のロール・プレイの相互行為分析—。保健医療社会学論集，14(1)，13-26，2003。
- 19) 玉里久美：慢性統合失調症患者がとらえた看護師による傾聴の意義とその様相。日本精神保健看護学会誌，22(2)，58-67，2013。
- 20) 山口智香，小岩井愛美，洪鍾粉，渡邊里佳，祖山文枝，矢嶋美雪，亀谷博美：胃ろう造設を選択した患者とその家族の思いの傾聴と理解。信州大学医学部附属病院看護研究集録，43(1)，35-38，2015。
- 21) 鳥海直美：相談援助職による傾聴に関する研究—在宅介護支援センターにおける実践から—。社会福祉士，(10)，83-90，2003。
- 22) 佐藤順子：傾聴することを学び，傾聴することから学ぶ—京都市上京老人福祉センター「お話を聴く会」の取組から—。福祉教育開発センター紀要，11，121-128，2014。
- 23) 山崎理央：対人援助における傾聴技法に関する学習について。人間文化学部紀要，16，147-154，2016。
- 24) 高木健志，宮崎まさ江：山口県立大学社会福祉学部における地域を基盤とした精神保健福祉士養成への取り組みに関する—考察—実習教育のさらなる充実に向けて—。山口県立大学学術情報，(7)，95-103，2014。
- 25) 原田奈津子：福祉実習前における学生の動機づけに関する研究—実習前の支援のあり方について—。長崎国際大学論叢，12，67-74，2012。
- 26) 原田奈津子，高島恭子，浦秀美：福祉分野における現場実習に関する現状と課題—実習生，養成校，及び実習先（施設・機関）の実習担当職員，利用者間での連携—。長崎国際大学論叢，10，187-196，2010。
- 27) 潮谷恵美：「社会福祉援助技術現場実習」の事後学習における「課題アイデンティファイ」—実習の事後学習におけるグループディスカッションの質的分析を通して—。久留米大学文学部紀要社会福祉学科編，(8)，59-70，2008。
- 28) 米本秀仁：ソーシャルワーク実習とスーパービジョン。ソーシャルワーク研究，33(4)，220-231，2008。
- 29) 佐藤俊一：社会福祉実習学の試み—「臨床への学」から「臨床からの学」へ—。淑徳大学社会学部研究紀要，37，1-20，2003。

（平成29年12月5日受理）

The Significance of Active Listening by Social Workers and Future Issues

Moriaki YOSHIDA

(Accepted Dec. 5, 2017)

Key words : active listening, social worker, persons with disabilities, skills of consultation and assistance

Correspondence to : Moriaki YOSHIDA

Saiseikai Yamaguchi Community Care Center

Yamaguchi, 753-0061, Japan

E-mail : yoshida.moriaki@navy.plala.or.jp

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.27, No.2, 2018 495 – 504)